
Line

氷鴉 刹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Line

【Nコード】

N2920Z

【作者名】

氷鴉 刹

【あらすじ】

安全なる土地と安全のために犠牲になった土地。度重なる核戦争と原子炉の暴発により、かつての国家は滅び、世界は再編成された。

全除染区域を掌握する政府は、資金援助と引き換えに安全な土地を与えた。

政府は計画”願いを叶えしモノ（Ad|CERUSSA）”でレジスタンス一掃作戦を計画していた（Line）

綺麗？ 蜂蜜？

ふん、よく言うわ。

大勢の中の一人に過ぎないことくらい知ってるわよ。

そう、あたし頼まれたのよね。

“貴方を壊すように”と。

女の恨みは怖いのよ？

せいぜい神か医師に助けを求めるのね。

まあ助かりはしないけど？

——だってあたし、*“Line”* だもの。

『*Line*』

「目をさませ！」

ノイズ混じりのぼろっちいスピーカーから流れる放送。

造られて数十年経ち、機械の老朽化は著しいが、進んで部屋に入るものなど居ない。

「あーなんなのよ！ どうせ出してくれないくせに！」

暗銀色の寝台からむくりと上体を起こす女が一人。

——艶のない、象牙。

まさにそんな姿であった。

紅玉ばかりがキラキラとじていて、見るもの全てを自然と不安にさせる。

左腕を通すために存在する筒はぐしゃりと潰れ、空気だけが詰まっている。

——不気味。

まさにその事に尽きる。

「全く一秒くらいサービスしてもいいじゃないのよ！」

ぶすくれるその顔は確かに、20代そこの乙女と変わらないが。
「ハイリスクノーリターンなのよ！　ねえ、本気でアナタ、汚すわよ！」

やはり恐ろしい存在であるのに違いない。

「お前が“知る”のも、“知られる”のもあつてはなんのだ。それにお前を出せば、我々の命を害する」

最先端の軽量、鉛製の防備服を装備していたがやはり、完璧とは言い難い。

導入の際に行われた実験では、被験者は確かに無事だったが放射線による影響は後々現れるモノ、安心しろというほうが間違いだである。それに、彼女の汚染度は類を見ない度合いである。

「よく言うわね。あたしを害したのはこのどなただったかしら？」

「我々は一人。お前では多くを。比にならん。それにお前に何の手も加えてなどいない。我々はお前に力を与えただけだ」

言わば諸刃の剣。

完全に何も手を加えてないと言えば嘘になる。

だが、彼女には存在したのだ。

「抗放射線体のお前に我々はしかるべき左腕を与えるだけなのだ」

「しかるべき左腕ですって？　つくづく狂ってるわね」

女はふんと鼻であしらい、スピーカーの電源めがけて床に散乱している“左腕”のひとつを投げつけた。

固く、中身の詰まった無機質な音。

残響は女と外界との接続が絶たれたことをしすぎるほどに主張していた。

「ホント、頭に来るわね」

その強気な語調に反して彼女は少女のように肩を抱き蹲った。

微かに震える肩、漏れるおえつは彼女が涙を流している確かな証。

静かな部屋に、狭い何もない部屋に響きわたる女のすすり泣く声など気にかけるものは居ない。

「力なんて」

首にかけた誓いのリングをきゅっと握り締める。

「早く」

自傷の術さえ持たない。ただただ無力で、惨めだった。

（忘れたの？ あなたになんて、誰も触れないわよ）

忌々しい限りなく白色の自分が嘲笑う。

強すぎる力は一人立ちして、一人歩きを始めていた。

（触れる者全部殺しちゃうんだから、あなた）

反狂乱の声が胸を確実に蝕む。

（左腕外せば普通の女とでも？ 笑わせないで！ つくづく馬鹿な女、つくづく馬鹿な兵器、あの人は迎えになんて来ないわよ！）

皮肉にも力が語るは真実で容赦なく打ち据えられ逃げられない。

それでも真実から逃れ、夢にすぎるは人間の愚かさか。

「来るわ、きつと来るのよ！」

争いを知らないようなそんな無垢な笑顔を浮かべる最愛の君は記憶の中でも輝くような笑顔を浮かべたままで、幻を色濃くする。

「きつと、助けに来るわ」

体内に埋め込まれた核種の核分離反応が臨界を超える前に、彼女の意識は無情な機械により奪われた。

「Line、無事停止しました」

青い光を放つモニターを神経質に見つめている男が報告する。

「反応レベルは？」

遮光眼鏡を掛けた、スーツの男が機械的に問い返す。

「U：235の核反応、瞬間的に1.3倍の上昇を確認しました」

「その程度なら問題あるまい。だが念のため、冷却モードに入れとけ」

「了解しました」

手際よく作業をこなす部下を満足げに見つめながら、男はただ笑った。

「兵器にすぎん癖に、女であろうとするから苦しいのだ。愚かなや

つよ」

薄暗い不鮮明なモニターに浮かびあがる白をただただ笑った。

「あ、局長！　また防護服を着てない！　危ないって言ってるでしょう！」

操作が終わった、先程の作業員がスーツの男をどやす。

「私は大丈夫だといってるだろう？　貴様は私が何故この局の長に成り得たか、知らぬ筈はないのだが」

ああまたかと溜め息を吐いて男は徐に肘掛け椅子から立ち上がる。

「ああちよつと！」

「まだ何か？　そんなに汚されたいか？」

そう男が脅せば誰もがすくみあがり、言葉は奪われる。

彼もまた、生体放射能であった。

ただし、彼はLineと違い、研究初期段階での核種導入のため、核種は自然放射能として何処にでも存在しているK、C等の比較的人類に影響のない核であった。

しかし、愚かな作業員たちは放射能というだけで戦慄するのだ。

（私は小型電子機器程度なのだがな）

独り、鼻で笑って、

「哀れな妹^{おんな}の姿を見てくださいただだ」

と、言い残して男はぶ厚い鉛の扉を開き、部屋から出た。

LEDライトの強い光に満ちた真白い通路に単一音。

この場所にはひどく不釣り合いな軽い足音が響いた。

そのリズムは単調で一寸の狂いもない、まるで機械のよう。

腰につけた探知機は鳴り止むことを知らず、無意味にわめき散らしている。

「全く、私には要らぬというのに」

忌々しげに呟くと、男は床に投げ捨て、足で踏み潰した。

火花すら出せぬほどに踏み潰し、それは床上で鉄屑と化した。

「例外を聞き入れぬ奴らが悪いのだ」

そして男はまた笑った。

最下層の蒼光に満たされた空間に一つの扉。

とうていそれらは人の手でどうにかなる代物ではない。

男はPHSを取り出し、管理室へ繋ぐ。

呼び出し音の後、先程の作業員が応答した。

「扉を開ける」

作業員の形ばかりの制止など相手にせず男は、ただそう言うて切った。

扉は間もなく開かれた。

作業員は、またかと呆れるだけなのだ。

聞く耳を持つような人ではないし何よりも上司の命令なので逆らうことはできない。

あと、被験体への罪悪感。最早誰も止める者はない。

一つずつ一つずつ、計10枚の扉が開くと、男は迷いもせず、中へ入っていった。

第一ロツクから中心部まで約30メートルの通路が続く。

象牙のように滑らかな、嫌に生命を帯びたような生暖かい光を湛えた白壁が迫る薄暗いそこを男はただ淡々と進む。

暗いのに関わらず遮光眼鏡を付けたままで、だ。

見えることよりも、見えないことを彼は望んだからだ。

男は最後に阻む、手動の扉——一般家庭のリビング口にあるような簡素な木製の扉——をすうっと目立った音もなく開け、閉鎖空間に足を踏み入れた。

この空間もまた無音。

外のざわめきもさえずりも一切届かない、ここも例外なく無機質であつた。

来るものを拒むが如く、左手は床を覆い、壁をみやれば朱がいく筋もいく筋も風化してこびりついている、その音無き喧騒だけがこの部屋に有機物が在ることを示している。

空間の色彩は赤色が白色のみに限られ、しかも壁の朱線と女の眼より他は全て白であつた。

男は唯一の有機物に触れた。

高熱で表面が粟立つたタイルに女は崩れ落ちていた。

その美しき残骸に男は触れる、手が熱線でただれて逝くのも構わずに。

地に伏した顔を持ち上げ、長い白糸に触れ、象牙の肌をなぞり、そして首を軽く押さえ付けた。

歪んだ笑みを浮かべて彼は、
「史上最凶と呼ばれる兵器も触れられれば脆いものだな」と、満足気に呟いた。

この言葉が固く眼を閉ざした彼女に届くことはない。
細い首は男が少し力を入れるだけで容易くへし折れそうなほど華奢であつた。

――まさに生かすも殺すも男次第。

歪んだ彼の性癖を満たす唯一の存在は彼女。

愛も身体も要らず、彼が欲しかつたのは彼女の生命に関する全ての決定権。

流動的な妹、ではなく滞流的な特注のハンドウェポンとしての存在であつた。

“武器”を捨て、男は手を見る。

自然物と人工物が融合した、異物。

だらりと垂れる布片と肉片、滴り落ちる不純な水。

「不良品だな」

男は冷却口に腕を突っ込み、乱暴に固める。

「後で、防衛特化研究課のホラ吹き共を絞めねばな」

彼の腕もまた、模造であつた。

限りなく本物に近い、繊細で無力な、“人間”の腕であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920z/>

Line

2011年12月10日11時52分発行